

豆をいりて家々はやし侍る也、さて淺間の社に神人多く出、儼ひの豆を打て、本社よりはじめ、末社末社一同に手を以て御戸を撃事夥し、町へは地震のやうに聞ゆ、これを聞て家々一時に豆をうち、戸外に出て、家の内の男のかぎり、戸々己が蔀をた、く事、物いふ音も聞えず、雷同してまばし、すさまじか、る事しらぬ旅人は、宿にて大に驚く者多しといへり、處々の風俗、世にしらぬ事多かる。

〔東都歳事記〕十二月節分立春日也

神田社疫神齋本社の左のかたに、疫神塚を立て、祝詞をさし、傍に後小松院あり、疫神齋の札を出す、この札は後小松院

儼勅筆といひ 本郷四丁目天満宮節分の守札を出す略 淺草寺觀音節分會寶前にて一山衆徒、般若心經

祈禱の守札をまきあたふ、諸人挑み拾ひて、堂中混雜せり、但し申の刻に行ふ、この札に登りて、節分したる所の平産ありといふ、又立春日の札をも出す、

儼豆

〔瑤囊抄〕節分ノ夜大豆ヲ打事ハ何ノ因縁ゾ是更ニ慥ナル本説ヲ不見由來ヲ云人ナシ但シ或

古記ノ中ニ云節分ノ夜大豆ヲ打事ハ宇多天皇ヨリ始レリ鞍馬ノ奥僧正谷美曾路池ノ端ノ方

丈ノ穴ニ住ケル藍婆惣主ト云二頭ノ鬼神共ニ出テ都ヘ亂レ入ントシケルヲ毗沙門ノ御示現

ニ依テ彼寺ノ別當奏シ申子細アリ主上聞召スニ明法道ニ宣旨アリテ七人博士ヲ集テ七々四

十九家ノ物ヲ取テ方丈ノ穴ヲ封シ塞テ三斛三斗ノ大豆ヲ熬テ鬼ノ目ヲ打ハ十六ノ眼ヲ打旨

テ抱ヘテ歸ルベシ又聞鼻ト云鬼人ヲ喰ハントスルヲ鯁鯁鯁字傍訓、塵添ヲ炙串ト名付テ家

家ノ門ニ指ベシ然ラバ鬼ハ人ヲ不可取ト云御示現也ト云々

〔古今要覽稿〕節分正誤 按に節分の夜大豆打事宇多天皇より始めるといふ事は信用し

がたし、まかはあれど故道遊軒は瑤囊抄の説をも捨てからずと申されしと也、正月七日若菜

を獻る事此御宇よりはじめればこれらによりて豆打事も此時よりといひ出しならんか、且

たしかなる本説を見ずといひながら、古記の中云節分の大豆打事云々といへるはとりとめ